

文芸

俳句

踏切りを吾より先にあきあかね
池田 逸子
自転車に古き音あり夜の秋
伊藤 敬子
あの頃は硬柿好み今熟し
今関満喜子
雷鳴に驚き戦く小犬かな
魚地 照子
梳る髪の湿りや夜の秋
江森 悦子
喉越しの水に薄暮をはぐらかす
川島 通則
あかあかと沈む夕日や終戦日
向後 寛
秋の日の従姉をいたわる足湯かな
越川せつ子
盆すぎて帰りし父母の仏間かな
越川 義則
盆踊り衣の裾を端折りけり
小松 藤男
稲の花咲いて筑波の風を聞く
佐瀬 輝夫
三千路たる子や香水の大胆に
椎名万里子
兵の墓二十才なり蟬しぐれ
鈴木とし子
子の休み残りわずかや秋の蟬
鈴木 利子

花野道人の笑ひもこぼれけり
玉虫 栗扇
送り火を終えて安堵や夜の帳
土屋美枝子
潮風のつくる干物や秋の浜
土屋 義昭
芒なびく仙石原や銀の色
戸村 静華
茹で落花生子等の好みの塩加減
内藤 くに
禁酒にも早寝にも馴れ秋に入る
早川 勇
ねだられて祖母語り部に夜の秋
藤田 雅夫

短歌

満開のさるすべりの花の紫が
夕闇の中にとけ込みてゆく
八角 三枝
ひまわりが軒先までに高く咲き
きれいに咲いたね声をかけた
平山 芳子
畑土はサラサラなれど霜知らずの
胡瓜播きゆく時の来たれば
押尾 輝子
笛の音の音色軽らに変はる時
神輿の水かけここぞと始む
西山満里子
来年も待つて居ますと門の辺に
送り火焚けば夫の立ちゆく
鈴木まこと子

還暦を過ぎたる私の誕生日
思いがけなくケーキが届く
浅野 榮子※
一瞬の幻の池作りたる
陽炎追いて車走らす
椎名美枝子※
歩けど今日の暑さ変わらず
細波のたちたる水面に誘われて
加瀬 弘子※

どうして猛暑続く日息子より
気遣ひくるる電話有りたり
田崎 尚美
歩みゆく山の傾りに秋の花
暑きが中に早も咲き初む
芹川 初子
数本のオクラ活かすと朝朝を
ペットボトルに水を掛けやる
青木 秀子
西瓜割りゲームに打ちし吾が竹刀
見事に的中二つに割りぬ
斉藤つね子
……………
人の名が思い浮かばずイロハより
口ずさみつゝ糸口探る
伊藤 定男
もの言はぬ一人のひと日終りたり
夫おらざれば人の恋しき
高梨 キヨ

※は新かな使いです。

こうほう博物館 67

赤い壺

今から二十年前に発掘調査された篠本のひかり工業団地内の神山谷遺跡で、一軒の住居跡から、赤い壺が二点出土した。この二点の壺は少し大きさが異なるが、形はほぼ同じで、大きい方の高さが30cm、最大径が26cmある。この壺の特徴は、口の部分の断面がくの字状に立ち上がり、底が丸底に近く不安定な形をし、表面全体に赤色塗彩されている。

町民ギャラリーでは、この秋に町の歴史の弥生から古墳時代の展示をする。
(社会文化課 道澤 明)



このような形の土器は、千葉県内ではほとんど例がなく、それを採り求めてみたら日本海側の山陰から北陸地方に見ることが出来る。そして長野から群馬と点々と見られることから、この山の道の筋を通って、北陸の文化が伝わってきたことが考えられる。この土器の時期はその形から、古墳時代中ごろの物で、この当時の